

すこやか健保

vol.775
2013年 6月号

Illustration: Tetsuzi Yamaguchi

健保組合財政は6年連続の大幅赤字

健保連が4月22日に発表した平成25年度の健保組合予算早期集計結果で、改めて健保組合財政の厳しい状況が浮き彫りになりました。25年度は4573億円の経常収支の赤字、全体の8割の健保組合が赤字の予算編成を余儀なくされたというものです。

20年度の高齢者医療制度の創設後、高齢者医療費に対する健保組合の拠出金負担が急激に増大したことが要因で、赤字額は20年度以降6年連続で3000億円を上回り、この間の拠出額は17兆4000億円に達し、累計赤字額は2兆6500億円にも及んでいます。

全組合の4割が保険料率を引き上げ、改善に努力しましたが、保険料収入に占める高齢者医療の支援金・納付金の割合は過去最高の46・25%に達し、本来の被保険者・家族のための健康づくり・相談指導など、保健事業を充実することも困難な状況が続いています。25年4月現在の健保組合数は1420組合となり、昨年に比べ15組合減少しました。健保組合に加入する被保険者・家族の減少傾向も歯止めがかけられない状況です。

多くの健保組合が保険料率を引き上げた背景には、積立金が減っているという事情があります。積立金による赤字の補てんができず、これ以上の保険料率の引き上げも困難になれば、解散する健保組合がさらに続出する懸念が強まります。健保組合の保険料率は、協会けんぽ(25年度10%)に比べ低い水準にあると言われますが、収支均衡を図るための実質保険料率は96・09%に上り、ほとんど変わらないのが実態です。

こうした状況に対し、健保組合・健保連は、高齢者医療制度の抜本的な改革に

現実を直視した改革論議に期待 — 社会保障制度改革国民会議は大詰め —

取り組むべきだと提案しています。現在の高齢者医療制度のまま、増え続ける医療費を放置しては、健保組合制度が破たんし、国民皆保険の崩壊にもつながりかねないからです。

現在、政府の社会保障制度改革国民会議で進められている議論は、これらの問題を解決する道筋になると期待されています。4月に行われた「医療・介護」の集中審議には、健保連も参加し、高齢者医療制度の負担構造の見直しと医療費適正化の必要性を強く主張しました。このなかで、高齢者医療制度への公費負担を拡充することをはじめ、70歳以上のすべての高齢者の患者負担割合を原則2割にすることや、カゼ薬など軽微な医薬品を保険給付の対象から外すなどの具体策も提案しました。

痛みを伴う改革ですが、医療費の適正化は、個々の健保組合の努力だけでは限界があり、国民皆保険を将来にわたり安定的に持続させていくため、避けられないと考えています。

国民会議における「医療・介護」の集中審議では、国保の都道府県単位化や被用者保険間の後期高齢者支援金の総報酬割の拡大などが論点になりましたが、医療費適正化を含めた具体的な改革は、さらに踏み込んだ議論が必要となっています。国民会議は、今年8月21日の設置期限までに、改革の基本方針をとりまとめる予定で、残す期間は2カ月余に迫りました。いよいよ大詰め段階です。

健保組合・健保連は、医療保険制度の方向性を指し示すためには、現実を正確に直視することが不可欠であることを強く訴え、主張の実現に取り組んでいきます。



今年はとくに注意が必要 “風疹”大流行！

風疹は、子どもに多い病気と思われがちですが、近年の流行では大人の患者が増えています。風疹は、免疫がない人への感染力が強いこと、また妊娠中の女性が感染した場合、子どもが先天性風疹症候群を発症する危険性があることから、自身のワクチン接種状況などを確認し、予防に努めることが大切です。

風疹の知識を正しく身につけ、自身の予防と周りの人への感染拡大を防ぎましょう。

1 20～40代の男性は要注意

昨年（2012年）から新聞やテレビで、風疹のニュースをみる機会が多くなりました。2010年度87人だった風疹の年間患者数は、2012年度はその30倍以上の2353人にまで増え、さらに2013年では4月末時点ですでに5422人とわずか4カ月で昨年の2倍以上となるなど、過去最悪のペースで流行しています。

患者の8割は男性で、とくに20～40代の働き盛り世代への感染が多くみられます。これは、この世代のワクチン接種率が低く、風疹に対する免疫が低いことが主な要因です。

流行地域は、東京や神奈川などの首都圏、大阪、兵庫などの都市部に集中していましたが、今年に入り、徐々に他の地域に広がっていることから、今後のさらなる感染拡大が懸念されています。

風疹は、妊娠中の女性が感染すると、子どもが難聴や白内障などを発症する「先天性風疹症候群」を発症する危険性があります。妊娠を希望される女性とその家族は、事前に必ず予防接種を受けておくことが重要です。



予防接種がとくに勧められる人

- 妊娠前の女性
- 妊娠前、妊娠中の女性の家族
先天性風疹症候群の予防のため
- 昭和54年4月1日以前生まれの男性
子どもの頃に定期接種の機会がなかったため
- 昭和54年4月2日～
平成7年4月1日生まれの人
予防接種の接種率が低い
- ワクチン未接種あるいは接種不明の人



2 感染力はインフルエンザの最大5倍

風疹は、発熱、小さく赤い発疹、リンパ節の腫れを主な症状とする病気です。リンパ節では、とくに耳の後ろや後頭部が腫れやすく、痛むこともあります。また、大人が発症すると子どもよりも症状が重くなるケースが多く、39度の発熱がみられるケースもあります。

風疹ウイルスは、咳、くしゃみ、会話などで散る飛沫を介して感染します。感染してから発症までの潜伏期間が14日～21日と長く、潜伏期間中もウイルスを出していることがあり、また発病しても軽症であったり無症状の人もあるため、知らない間に感染していたり、周りの人にうつしていたということも珍しくありません。

風疹は、免疫が無ければ、同じく飛沫を介して感染するインフルエンザよりも2～5倍も高い確率で感染し、思っている以上に感染しやすい病気です。「もしかすると風疹かも？」と疑うような症状が出た場合は、早めに医療機関を受診しましょう。

3 周りの人にうつさないために

風疹ウイルスに対する特別な治療薬はありません。発症した場合は、発熱には解熱剤など、症状に対する治療を行います。そのため、風疹対策はワクチン接種（予防接種）が基本です。

予防接種がとくに勧められるのは、妊娠前の女性とその家族です。また、風疹にかかったことがない人、予防接種を受けていない人、どちらも不明な人も予防接種を検討しましょう。予防接種を受けたことがあるかは、母子手帳などで確認することができます。

さらに、風疹にかかったことがある人も要注意。抗体が十分に作られていなかったり、記憶では風疹にかかったと思っていたものが、じつは麻疹（はしか）だったということも少なくありません。1回かかったから大丈夫！と過信せず予防に努めましょう。

周りの人にうつさないためにも、症状が出たり、感染が疑われる場合は、出勤や出かけは控え、医療機関を受診して、お医者さんの指示にしましょう。感染拡大を防ぐためにも、1人ひとりの心がけが大切です。



COLUMN

先天性風疹症候群とは？

妊娠中の女性が風疹に感染すると、赤ちゃんが、「耳が聞こえにくい」「目が見えにくい」「生まれつき心臓が弱い」などの「先天性風疹症候群」を発症することがあります。とくに、妊娠20週までの早い時期に感染すると発症しやすいので、注意が必要です。

赤ちゃんを守るには予防接種が1番効果的です。しかし、妊娠中は風疹の予防接種を受けることはできませんので、「妊娠前」に予防接種を受けましょう。